只見町立小学校の在り方検討懇談会報告書

平成２９年１２月２０日
只見町立小学校の在り方検討懇談会

次世代の地域を担う児童の教育・小学校の現況を意見交換し、それらを踏まえて将来予想される小学校の在り方について、次のとおりまとめました。

１　教育効果について

（１）国語、算数などの教科学習

現状の小学校の指導は、少人数であるため、個に応じた指導がきめ細かくできている。このことは、学力差への対応を容易にしている。

しかし、多様な考えや意見に触れにくく、学び合いによりお互いを高め合うこと、良いライバル意識が育たないなどのマイナス面がある。

三小学校の交流機会を増やすことによりマイナス面の改善が図れるのではないかという提案があった。交流の方法としては、テレビ会議システムの利用や、IT を使った授業、スクールバス移動による交流授業があげられた。

一方、体育、音楽などの教科では、少人数のため、集団で行う合唱や合奏、集団での運動ができにくい。反面、一人一人の出番が多いこと、安全確保が図られていることが良さである。

学年合同で行うことにより人数を増やすことや、競技のルールを工夫することによって少人数でも対応が可能なこともある。

好きなこと、興味のあることを伸ばしてあげられる環境づくりを望む意見があった。

（２）特別活動

農事体験、自然体験、地域学など多く取り入れ学ぶ機会を増やすことは、子どもたちの世界を広げ、地域を愛する気持ちを育む。現状では、学校や地域の実態に応じた活動ができている。例えば、特別活動の成果を発表する際には、多くの地域の方が参観に集まり、地域と一体感があり、そのことにより地域も元気になっている。

一方、少人数であるためクラブ活動の選択肢が少ない、活動が限られる、などの制約がある。

今後の提案として「地域の良さを生かした教育により、ふるさとへの

愛情を深めること、学んだことを地域の人に披露することで地域の活性化につなげていってはどうか。」「自分の将来（なりたい職業、やりたい事）を考えられるように多くのことを体験・見聞させたい。」などがあげられた。

（３）その他

児童数が少ない学校では、学年を越えて人間関係が親密になりやすい。しかし、固定化された人間関係になりやすいなどの懸念がある。

２　学校と地域について

（１）地区（只見、朝日、明和）行事

地区ごとに学校があり、地区の運動会、文化祭など行事に参加しやすい。さらに地区によって多彩な行事、独自の伝統が受け継がれ、子ども一人一人の活躍が見られる。

明和は、伝統芸能。朝日は、ESD。只見は、海洋教育と、各小学校それぞれ力を入れているものが違い、地区のカラーがある。また、学校活動に見守り隊、本の読み聞かせなど地区のボランティアの方々が協力してくれる。

子どもたちは、各振興センターが行うハイキングや川遊び、駅前行事などの活動に参加することにより、世界が広がり、成長している。また、学校の先生も子どもたちと地域の一員として楽しんでいる。

しかし、集落に人が少なくなっているため行事の継続が心配され、集落自体の存続が危うい。今後は、地区のよさを生かしながら、行事内容を縮小し持続させていくしかないのではないか。あるいは、地区の住民にこだわらず、広く多くの町民に伝統行事を知ってもらい参加してもらうことが、伝統文化の存続につながるのではないか。さらには、地区の住民以外の人にも伝統文化を知ってもらい、誰でも気軽に参加（見学）でき、大人も子どもも交流できるようにしてはどうかなどの意見が出された。

また、昨年、只見小で行われた「よさこい」などのイベントを三地区小学校合同で取り組んではどうか。都心の活動の拠点を只見にして交流を持てないかなどの提案があった。

（２）子ども会、集落の活動

それぞれの集落で行われる祭礼、豆まき、夏休み旅行、おんべ、天神講などは、子どもたちにとって身近で参加しやすい。子どもが少ない集

落では、子どものいる集落に混ざって気軽に参加している。

子ども会の活動は、集落毎に親たちが中心に夏休みなどに行っている。ラジオ体操は、上級生が中心で行っている。集落で子ども祭りをすると集落外から多くの子どもが集まる。さらに、それを一歩進めて都市部の子どもとの交流も考えてはどうかとの提案があった。

どの集落も人が少なくなっており、今後が心配である。また、地域の縦のつながりが希薄になっている。子ども会や集落も統合せざるを得ないのではないか。実際、大きい集落と小さい集落では、活動に差が出てきており、小規模集落には行事や活動の負担感がある。

町で放課後子ども教室、子育てひろばを実施しているので、安心して働くことができる反面、日中、地域に子どもがいないとの意見があった。

子ども達のためにも集落への参加の場、参加しやすい雰囲気づくりが大事。集落行事は、近くの集落（２～３）で集まり、合同で、あるいは集約して実施するなど、住民に負担にならないようにしてどうか。集落をゆるくまとめた活動体を編成してはどうか。子ども達が地域の人と過ごす日を設けてはどうかなどの意見があった。

学校を地域コミュニティの拠点にし、地域の中の達人を発掘養成し、人材を活用することで、学校と地域が相互に活性化され、ふるさと愛がより育まれるようになるのではないか。いざという時に顔と名前が分かる関係でありたいとの意見があった。

（３）その他

子どもたちは、老人クラブ、地域の人材の協力により、地域に育てられているという実態がある。反対に、子どもたちが近くにいることにより、大人やお年寄りも元気をもらっている。

登下校時にあいさつしてくれる子どもがいて気持ちがよい。大人からも声をかけ合って、地域の子どもとして絆を深められたらいい。地域の方があいさつをしているからか、子どもたちは、あいさつができている。地区と一体となって、地区に育てられている。子どもたちは、ふるさと只見がとても好きである。

一方、子どもの声が聞こえない、只見地区では中学生を見ないと現状を分析する意見もあった。

中学校は統合になり交流範囲が広まったことはよかった。中学校では、只見の自然の素晴らしさ以外にも、素晴らしい産業があると指導をしている。もっと、子どもたちに、只見の産業を知ってほしい。安定した産業基盤があれば、只見で生計をたてられる。新規就農という形で、実際

に住みはじめ、家族をもった人もいる。

伝統芸能、つる細工、農業などに携わる地域の達人を生かすことを考えてほしい。

学校では地域に密着した教育として、トマト農家見学、稲作体験をしている。昔のように家庭で農作業をしないので、子どもたちは、食べ物の大切さ、仕事のやりがいを、体験を通じて感じている。

他地域から只見に移入できるような施策を展開し、人を引き付けてはどうか。田舎に住みたい人はいる。まずは、体験できる取組みを行ってはどうか、他地区との交流による情報発信はどうか、都会の人を呼び込む施設を作り、定住へと結びつけてはどうか、只見の自然（気候・地質）を生かしてサーバーの拠点としてはどうかなどの提案があった。

南会津郡内、大沼郡内どこでも同じ状況にあるので、只見町単体で考えないでほしい。学校は関係者にすれば聖地かもしれないが、地域にとってはシンボルであり、活力の源になっている。IT を使った学習効果を高める方法を取り入れ、合同での授業を実施してはどうか。学校に地域のコミュニティ広場としての役割を加えるなどして、現在の３校を積極的に地域に開放してはどうか、などの意見があった。

３　学校施設について

（１）校舎、体育館、校庭、プールなど

各地域とも自分の地域に施設（小学校）があり、通いやすい。朝日小学校は古く、傷みのある所もあるが、大切に使われている。このまま大切に使ってほしい。改築等については、今後の小学校の在り方が見えてから検討してほしいなどの意見があった。

（２）備品や道具など

学校備品の共有化を進め、各小学校で貸し合いをしてもよい。学校配当予算で賄えないこともある。計画的に購入してほしい。

（３）その他

地域に図書館がないので、学校図書館に地域図書館の機能を持たせてはどうかとの提案があった。

４　通学について

（１）徒歩通学

地域に学校があるということは、徒歩でも通学できる距離にあると

いうこと。徒歩通学は、健康的で体力向上につながる。上級生が下級生の世話をし、お互い成長し合えている。徒歩通学時にあいさつのできる子どもたちを見ていると気持ちがいい。雪道の通学は大変だが、只見ならではの光景である。また、集団下校で指導力や責任感、親愛感等が養われる。

一方、児童が少なくなり徒歩通学ができなくなっている。街灯が少ない、細い道や堀など危険箇所がある。通学路等の記載看板が少ないように思うなど、通学環境の整備を望む意見があった。

雪道で危険なのは車であり、運転手のモラルの問題ではないか。保護者や地域住民による対策と子どもの危険認識度アップを図る。明和地区で行っている見守り隊のような活動が他地区にも広がると、安全性が高まり老若の絆が深まるなど、の提言があった。

（２）スクールバス通学

安全に通学でき、家庭で安心して子どもを送り出せる。登下校時間が一定で安心していられる。また、中学生、高校生のバスの接続も良く、効率的でよい配車である。本来は、自分の足で登校するのが理想だが、広い只見町はスクールバスが不可欠である。

徒歩通学と比べ、上級生が下級生の面倒を見る良さが欠ける。小学３年生がスクールバスに３０分乗車して通学するのはよいが、小学１年生、２年生には、長時間の乗車は負担になる。

冬季は、安全のため、全員スクールバスでの通学を検討してはどうか。また、雪んこタクシーを利用し、人数や時間に合わせて対応してはどうかなどの提案があった。

５　その他

（１）PTA 活動

地区の良さを生かしている。学校対抗のレクリエーションなどは、和気あいあいと参加でき、先生と保護者の交流の場ともなっている。

反面、会員数が減少し、活動する人が減っている。様々な活動を行い頑張っているが、児童数の減により会員の負担は大きくなっているため、軽減を図ってほしい。また、学校対抗レクリエーションは少人数でもできる内容の工夫が必要。役員、委員でなくても気軽に意見を言える場の設定やアンケートの実施を求める声がある。

（２）スポーツ少年団

現在三地区合同で活発に行われている。運営には親の協力が不可欠である。また、地域の人が指導者として関わっていることは高く評価できる。

しかし、三地区から集まっての共同練習なので、保護者の送迎が大変である。練習、試合、学校、家庭生活のバランスが必要である。子どもたちの負担過重になっている。

大会、練習試合、日頃の練習時間の見直しを図り、無理なく子どもたちがずっとスポーツを続けたいと思えるように改善を求める提案があった。

（３）その他

子どもたちに山登り等アウトドア活動をいっぱいさせてほしい。只見でしかできない体験活動が多くある。大人になっても只見にいたいという地域づくりを大人達が一丸となってやっていくべきだと思う。

放課後子ども教室、子育て支援は本当にありがたい。

安心して子育てできる環境整備を進める。他町村より抜きん出る施策を行うことにより、児童数を増やす努力が必要ではないか。例えば、母子、父子家庭を積極的に受け入れる施策（住居や生活の支援策）はどうかと提案があった。

６　まとめ

検討懇談会においては、三地区にある小学校は、地域の中で重要な役割を担っていることを確認した。しかし、地区を構成する集落の人口が年々減少し、集落活動がままならない状況にあり、生活圏としての地区がこのまま継続していけるのかという現実がある。

今後さらに人口減少が進むと予想され、少人数となることが見込まれる小学校の在り方としては、「未来のある児童にとって本当に必要な教育環境とは何か」の議論を、今後も状況を把握しながら継続していく必要がある。

只見町立小学校の在り方検討懇談会の検討経過

	日時	会場	内容
第1回	平成29年3月1日 午後6時半～午後8時	朝日振興センター 2階ホール	1　委員長、副委員長の選出について 2　只見町立小学校の現状について 3　意見交換
第2回	平成29年7月10日 午後7時～午後8時半	朝日振興センター 2階ホール	1　第1回検討懇談会の内容について 2　分析・提案シートをもとにワークショップ 3　グループの意見を発表
第3回	平成29年10月12日 午後7時～午後8時40分	只見振興センター 1階学習室	1　検討懇談会報告書（素案）について 2　意見交換
第4回	平成29年11月21日 午後7時～午後8時半	朝日振興センター 1階農事研修室	1　検討懇談会報告書（案）について 2　意見交換

平成29年度　只見町立小学校の在り方検討懇談会委員名簿

（順不同）

	所　　属	役　職	氏　名	備考
1	只見小学校PTA	会長	新國　伸一	
2	朝日小学校PTA	会長	目黒　夏樹	
3	明和小学校PTA	会長	目黒　広信	
4	只見中学校PTA	会長	渡部　和美	
5	只見保育所保護者会	会長	五十嵐　譲	
6	朝日保育所保護者会	会長	梁取　由果	
7	明和保育所保護者会	会長	酒井　治子	
8	只見地区区長連絡会	会長	長谷部多一	
9	朝日地区区長連絡会	会長	菅家　達朗	委員長
10	明和地区区長連絡協議会	会長	菅家　和義	副委員長
11	只見小学校	校長	関根　隆	
12	朝日小学校	校長	小林　義弘	
13	明和小学校	校長	渡部　早苗	
14	只見中学校	校長	今井　仁	

平成28年度　只見町立小学校の在り方検討懇談会委員名簿

（順不同）

	所　　属	役　職	氏　名	備考
1	只見小学校PTA	会長	目黒　健太	
2	朝日小学校PTA	会長	目黒　英	
3	明和小学校PTA	会長	三瓶　錬	
4	只見中学校PTA	会長	鈴木　淳	
5	只見保育所保護者会	会長	五十嵐　和弘	
6	朝日保育所保護者会	会長	渡部　弥	
7	明和保育所保護者会	会長	角田　祐介	
8	只見地区区長連絡会	副会長	五十嵐　修	
9	朝日地区区長連絡会	会長	菅家　達朗	委員長
10	明和地区区長連絡協議会	会長	梁取　哲朗	副委員長
11	只見小学校	校長	関根　隆	
12	朝日小学校	校長	鈴木　正和	
13	明和小学校	校長	渡部　早苗	
14	只見中学校	校長	今井　仁	